
男で中学生なのにママ！

華淋籐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男で中学生なのにママ！

【Nコード】

N5627F

【作者名】

華淋籐

【あらすじ】

顔がかわいくてモテモテな主人公。今日も女の子と遊ぼうと思っていたのに、「えっ！うそ、僕がママになるの」もちろん子育てなんかしたことない。ほぼ一人暮らしで家事はある程度できるけど、料理はあんまりしたことない。でも五歳の子供にましてや女の子にコンビニのお弁当ばかり食べさす訳にはいかない。（主人公はどんな年齢の女性にも優しいです。特にかわいかったり綺麗であればあるほどに）そんな主人公の子育て奮闘紀

プロローグ：春の日の出会い

春、それはすばらしい季節。

春、それは寒い冬を耐え忍んだ植物たちの季節。

そして、春は女の子たちの服を一枚一枚減らしていく季節。

春休み、それは学生にとってのパラダイス。それは宿題がないからだ。（宿題のある学校もあるでしょうが）

そしてそんな春休みを人一倍満喫しようとしているのがこの物語の主人公だ。

その主人公は160cmぐらいの身長の華奢な少年だ。顔は整っていて、かっこいいというよりかわいい感じの顔だちだ。

この後に待ち受ける試練に気づく様子もなく、のほほんとした顔で歩いている。

「うーん、今日は誰と遊ばっかなー亜理紗ちゃんにしようかなーそれとも真里香ちゃんかなー

それともこの前知り合った別の中学の蓮ちゃんかなー」

そんな世のモテない男性が聞いたら怒り狂いそうなことをいいながら歩いていると、五歳ぐらいのかわいい女の子をつれた女性が地面に座り込んでいました。

「どうかしたんですか？」

周りを歩いている他の人はみんな見て見ぬふりをしてそそくさと歩いていきます。

しかしこの主人公は女性に優しくを信条としているので、思わず声をかけました。

聞いてみると女性はおなが痛いそうです。

かわいそうに思った主人公は、

「近くの薬局で薬を買ってきましようか？」

そうたずねました。すると女性は、

「あの、自分で買いに行くので、少しの間この子のこと見ていてくれませんか？」

普通に考えれば自分の娘を見ず知らずの他人に預けて買い物なんてと、不審に思うだろうが

この少年は女性には優しい。特にそれが美人であればあるほどに。

だから少年はあまり深く考えずこの少女を預かることにした。

これが後々にどんな影響を及ぼすかも考えず。

プロローグ：春の日の出会い（後書き）

まず読んでくださってありがとうございます。

第一話からは主人公視点または少女視点の主になります。

主人公たちの名前は第一話でわかります。

なるべく早く執筆しますので、おもしろそうだなっと思ってくれましたら、続きも読んでください。

第1話：主人公の名前は海、女の子は滯莉です（前書き）

プロローグよりは読みやすいかと思います。

基本的に滯莉の会話には漢字を使いません。

誰が話してるかわかりにくければそれも参考にしてください。

第1話：主人公の名前は海、女の子は滯莉です

僕は女の子と二人でお母さんが帰ってくるのを待つことになった。

女の子のお母さんは、なにかあったら電話してください、といって携帯の電話番号を教えてくれた。

そして女の子のお母さんは薬局に行ってしまったので、僕は少し女の子と話をすることにした。

「ねえ、名前なんていうの？」

「はるせ みおりです」

「へえ、滯莉ちゃんっていうんだ、かわいい名前だね」

あつ僕は天城^{あまぎ かい}海^{かい}っていうんだ」

「あつ！それでね滯莉ちゃん、滯莉ちゃんママね、おなか痛いからお薬買いに行ったからね、僕と一緒に待ってよ」

「はーい」

「うん、いい返事。滯莉ちゃんはいいい子だね」

「えっ、みお、いいこ？」

「うん、ママがいなくてもちゃんとおとなしくできる子はいいい子だよ」

「えーふつーだよ。だってみお、よーちえんいってるもん」

「あっそうなんだー漣莉ちゃんって何歳なの？」

「えい」

うーん五歳でこの聞き分けのよさ、十分えらいと思うんだけどなーその辺どうかわかんないけど、少なくとも漣莉ちゃんの五倍ぐらい生きてる僕のお姉ちゃんはおもったわがままだと思う。

めったに家に帰ってこないけど帰ってきた時は地獄だ。

僕を馬車馬のように働かせ、自分はお酒飲みながらテレビを観るよな人だ。

あっちなみに僕の家族は両親ともに健在で、十歳上の姉と一歳下の妹と僕の五大家族なのだが、

両親ともに海外で、姉はどこに住んでるかよく知らない、そして妹は僕とは別の学校に通っていて寮に入っているの

僕はほぼ一人暮らし状態だ。

「かいおにいちゃん」

おっと自分のちょっと不幸な境遇に思わず考えこんじゃった。

今は漣莉ちゃんともっとしゃべっていいなと。

「うん？どうしたの、漣莉ちゃん？」

「あのね、ママね、あとどれくらいでかえってくる？」

「うーん、わかんないけどすぐだと思うよ。薬局近いし」

薬局までここからだいたい五分ぐらいなので、たぶん帰ってくるまで二十分もかからないだろう。

そうして僕が滯莉ちゃんとおしゃべりを始めてから一時間ほど経った。

「ねえ、ママまだなの」

「うーん、遅いなー何かあったのかなー」

「えっ、なにか？ママ死んじゃう？」

そういつて滯莉ちゃんは涙ぐんでしまった。

「そっ、そんなことないって、今からちょっと電話してみるから」

幸い電話はすぐにつながった。

「はい、もしもし、春瀬です」

「あつ、もしもし、滯莉ちゃんを預かってる天城です」

うーん、なんかちょっと誘拐犯っぽいかも

「天城さん、なにかあったんですか？」

「なにかあったんですかじゃないですよ。おなか大丈夫なんですか？」

「はい、ばっちりです。だってうそですから」

「へっ、うそ？」

「はい、実はおなかいなくなかったんです」

「あっ、そうなんですか。よかった、じゃあすぐに戻ってきてください」

「天城さん、少しお願いしたいことがあります」

「えっ、なんですか？」

「実はですねー」

「もう少しの間滯莉を預かって欲しいんです」

「えっ、もう少しって何時間ぐらいですか」

「うーん、二、三年ぐらい？」

うーん、僕には二、三年って聞こえたけど、たぶん聞き間違いだね。

うん、聞き間違い、聞き間違い

「すみません、もう一回いってもらえますか」

「二、三年ぐらいです」

うわー、聞き間違いじゃないみたいだよー

「えっと、二、三年も預かれないですよ」

「できますよ。誰も声をかけなかった私に声をかけてくれた天城さんなら」

「そんなことないですよ。普通、人が苦しんでたら助けますよ」

「そんなことありますよ。だって私はあそこに二十分ぐらいいたんですから」

そうだったんだ。今日結構寒いし、滯莉ちゃんの方が風邪ひいちゃわないかなあ

「今、滯莉が風邪ひかないかなあとか考えませんでした？」

「へっ、何でわかったんですか」

「やっぱり優しいですね。実は私、これから飛行機に乗って海外に行くんです。滯莉を連れて行くことはできません。」

しかも頼れる親戚もいません。お金は十分振込ますし、どうかお願いできませんか？」

「お金は別にいいんですけど」

うーん、どうしよう。ほんとに困ってるみたいだし、でもこのぐらゐの歳の子には母親が必要だろうし。

「でも、ほんとにいいんですか？ 僕みたいな見ず知らずの男に娘を

預けて」

「大丈夫ですよ。あなたなら、それに滢莉はたぶん将来美人になりますよ」

「なななな、なんですか、美人とか関係ないですよ」

「はあ、わかりました。預かります。でもできるだけ早く帰ってきてくださいよ。滢莉ちゃんがかawaiiそうですから」

「はい、そうですね。では滢莉をお願いしますね」

「わかりました。じゃあ少し滢莉ちゃんにかわりましょうか？」

「そうですね、じゃあ少しかわっていただけますか」

そして僕は滢莉ちゃんに携帯を渡した。

「うん、うん、うん、わかった。じゃあママ早く帰ってきてね」

なにを話してるのかわからないけど滢莉ちゃんは納得してるみたいだなあ。うーん聞き分けよすぎないかなあ。

「かいおにいちゃん、でんわ」

電話終わったみたい。

「まだ、電話きれてないの？」

「うん、ママがかわってて」

「そうなんだ、じゃあかして」

「はい」

僕は滢莉ちゃんから電話を受け取った。

「もしもし」

「ああ、天城さん、それでは滢莉のことよろしくお願いしますね」

「はい、任せて下さい！と自信を持って言うことはできませんけどがんばります」

「それから滢莉の背負ってるかばんの中に当面必要なものと、これから必要なことが書かれた紙が入ってますから」

「はい、わかりました」

「最後に、この電話もうじき使えなくなりますんで」

「えっ、それって電話できないってことですか？」

「はい、それでは滢莉のことお願いします」

それで電話は切れてしまった。

「えっ、ちょっと待ってください」

電話はもう切れていたが僕はもの言わぬ電話に話し続けた。

「はあ」

少しして僕は電話に話しかけるのを止め、滯莉ちゃんに話しかけた。

「それじゃあ、僕の家に行こっか」

「うん」

こうして僕のいつまで続くかわからない子育て生活が始った。

第1話：主人公の名前は海、女の子は滯莉です（後書き）

第1話読んでくださってありがとうございます。

まだまだ始めたばかりで感想なんかないかもしれませんが、もしあれば一言でもいいので感想ください。もちろん、いい感想はうれしいですが、悪い感想も今後につながるので募集します。

第2話…不器用な育児

僕は滯莉ちゃんと一緒に家に帰った。

そして家に着きとりあえず滯莉ちゃんにジュースをあげ、テレビをつけてそのテレビを滯莉ちゃんが観ておとなしくしている間に

今後のことを考えることにした。

そういえば滯莉ちゃんのお母さんがかばんの中にいろいろ入れておいたと言っていたのを思い出した。

僕は探してみたのだが、どこにもそんなものなかった。

滯莉ちゃんの持ち物はうさぎのぬいぐるみだけだった。

だから滯莉ちゃんにぬいぐるみ以外に何か持っていないか聞いた。

「ねえ、滯莉ちゃん、このぬいぐるみ以外に何も持っていないの？」

僕はぬいぐるみを指差しながら言った。

「うん、ミオこのかばんいがい何ももってないよ」

滯莉ちゃんはぬいぐるみを指差しながら言った。

「そっかーかばん以外ってかばん!？」

「うん、かばん」

「えっ、これかばんなの？」

「そうだよ、かーいいでしょ」

「うん、かわいいんだけど、これがかばんだとは思わなかった」

でもこれで無事かばんを発見できたので一歩目でつまづくことは回避できそうだった。

「濤莉ちゃん、ちょっとかばんの中見せてもらってもいいかなあ？」

「うん、いいよ」

僕はかばんを開けた。

中にはパジャマが一着と下着二枚、それから靴下二足とかわいいうさぎの絵が表紙に描かれたノートと一通の手紙が入っていた。

僕はとりあえず手紙を取り出した。

その手紙は和紙でできた綺麗な封筒に入っていた。

僕は中に入っている手紙を取り出し読み始めた。

『あなたがこの手紙を読んでいるころ私はもう国内にはいないでしょう。』

自分勝手な親で本当にあなたと濤莉には悪いことをしたなっと思

っています。

そしてこんな勝手なお願いを聞いてくださったあなたにはすごく感謝しています。』

これが一枚目に書かれていたことだ。

僕は二枚目も読み始めた。

『あなたが学校に行っている間、滯莉は幼稚園に預けてください。

太陽幼稚園への入園手続きは済ませてあります。

制服は買ってください。

それから他の服や生活に必要なものはすべて買ってください。

お金はあなたの通帳に振り込んであります。

最後に、本当に滯莉のことお願いします』

手紙にはそう書いてあった。

そして疑問に思ったことが一つ、どうやって僕の通帳に振り込んだのかということだった。

まあでも、考えても無駄だなと思いきやることをやめた。

それよりも何よりも考えるべきは滯莉ちゃんのことだなと思った。

とりあえず買い物は明日行くとして、

今日、これからのことを考えなければいけない。

幸いなことに家事は苦手ではない。

ただ、この場面で一番重要だと思われる料理以外はだ。

そうなのだ、僕は料理が得意ではない。

得意ではない、というよりあまり経験がない。

一人暮らしなのになぜ料理だけしないのか不思議に思うかもしれないがたぶん僕は二人で暮していれば料理をしたらだろう。

なぜ二人で暮していれば作り、一人だと作らないのかといえば、めんどくさいからだ。

僕一人の分だけを毎日作るのはめんどくさい。

僕一人だけならスーパーのお惣菜で十分だ。

しかも食材を使い切れず腐らしてしまう可能性も高い。

だから僕は家事の中では料理だけできない。

しかし、五歳の子供に毎日スーパーのお惣菜を食べさせるわけにもいかない。

やっぱり子供には家で作ったものを食べさせたい。

自分が姉と妹がいなくなってから、一人になったという少し似ている境遇なだけに特にそう思った。

（姉と妹は同じぐらいの時期に家を出ました。両親はその前からいませんでした）

その時は主に姉が料理を担当していて、僕と妹はそれ以外の家事をしていました。

姉は料理以外の家事は一切しませんでした。ですからたまに家に帰って来たときも料理以外の家事を全て僕にやらせます）

だから僕は今日から料理をがんばることにした。

そんなことを考えていたら滯莉ちゃんに話しかけられた。

「ねえ、ねえ、カイおにいちゃん、ミオおなかすいたー」

早速来たなあと思った。

「そうだねー、僕もおなかすいたよ。でも材料がないから今からスーパーに行こ」

「ミオ、スーパーすきー」

「そうなんだー、じゃあ早速行こー」

「いこー」

そして僕たちは近くのスーパー『何でもそろそろスーパー初心者』に着いた。

来るたびに思うのだがこの名前はなんなんだろう。

もしもの時が怖いから何でもそろえているのだろうか？

実際、この店は何でもそろろう。

よく使うような食材は勿論のこと、専門店にしか置いてないような珍しいもの、果てには生活用品に至るまでなんでも

置いてある。

当然たくさん品の品物が置いてある分このスーパー、ものすごく広い。だから滯莉ちゃんが迷子にならないように気をつけなければならぬ。

「滯莉ちゃん、迷子になるといけないから手をつなご」

「うん！ミオ、て、つなぐのすき」

そうなんだ、滯莉ちゃん手をつなぐの好きなんだ。

好きなんだったら来る時も手をつないであげればよかった。

「そうなんだ、じゃあ手をつないで買い物開始」

「かいしー」

何を作ろう？

正直、料理初心者の僕はたいしたものを作れない。

しかも今日は時間も遅いので、カレーみたいに時間をある程度かければ食べれるものが作れるようなものは無理だ。

「うん、今日は野菜炒めにしよう」

野菜炒めなら野菜を切ってお肉と一緒に炒めればできる。

ご飯は帰った時には炊けているだろう。

早速僕たちは野菜の置いてあるコーナーに向かった。

「うーん、キャベツと、にんじんと、あっそういえば溚莉ちゃん嫌いな野菜ある？」

「うーうん、ないよー」

「そうなんだー偉いね」

僕たちはこんな会話をしながら買い物をして、家に帰り、僕は料理をした。

すごくおいしいってわけじゃなかったと思うけど溚莉ちゃんは喜んでくれた。

「ごちそうさまー」

滯莉ちゃんは残さず食べていた。

人のために料理を作るのって結構楽しいな。

後は滯莉ちゃんをお風呂に入れて寝るだけだ。

だけなのだが、お風呂が最大の難関だ。

五歳を一人でお風呂に入れるわけにはいけないので一緒に入るわけだが、正直なところすこし恥ずかしい。

でもそんなこと言ってもしかたないので、覚悟を決め一緒にお風呂に入った。

覚悟を決めて入ってみればなんてことはなかった。

むしろ楽しくて長く入りすぎたぐらいだった。

唯一滯莉ちゃんが持っていた替えの服であるパジャマを滯莉ちゃんに着せ、リビングで水を飲み、後は寝るだけだった。

この家は無駄に広いので滯莉ちゃんの部屋を用意することは可能だ。でも使っていない部屋はそう頻繁に掃除することはないので、一度掃除してからでないと使えないだろう。

だから今日はとりあえず唯一この家で畳のある客間に布団を敷いて寝てもらうことにした。

「ねえ、滯莉ちゃん、今日はここで寝てくれるかなあ」

「うん、わかった」

「えっと、一応滯莉ちゃんが寝るまでお兄ちゃんここにいるね」

「……うん」

今の間は何だろう？もしかして嫌なのかなあ？

「もしかしてもう出て行ったほうがいい？」

「でていかないで」

滯莉ちゃんはものすごい勢いで首を振っている。

「そ、そっかじゃあ滯莉ちゃんが寝るまでここにいるね」

「うん」

「じゃあもう寝よっか、滯莉ちゃん、おやすみ」

「おやすみなさい」

それからすぐにかわいい寝息が聞こえてきた。

今日はいろいろあって疲れたのだろう。

「うーん、僕も疲れたなーまだいつもより早い時間だけど寝ようかな」

そうして僕はいつもより早い時間にベッドに入り寝た。

3がつ30にち はれ

きょう、ママはしごとでとおくにいつちゃった。

ミオはカイおにいちちゃんとくらすことになった。

カイおにいちちゃんのことまだあんまり知らないけど、やさしいとおもった。

でも、ミオはわがママをいつちゃいけない。

ほんとはひとりでねるのこわいけど、でもわがママいつてきらわれたらひとりぼっちになっちゃう。

そのほうがミオはこわいから、だからミオはいいこでいなくちゃダメなの。

きつとママはミオがにんじんだべなかったり、わがママいたりし

たからしごとにつれていってくれなかったとおもう。

きょうからはミオぜったいにわがままいわないから、ひとりにしないでカイおにいちゃん

第2話：不器用な育児（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回会話が少なめです。

まだまだ新しい生活になれない、というよりお互いどう接すればいいかわかりません。

海にしてみれば滢莉を娘として見るのか、妹として見るのか、それとも別の？

滢莉も海をママとして見るのか、お兄ちゃんとして見るのか、それとも赤の他人として見るのか？

そんな二人の関係がはっきり定まれば自然と会話も増えると思うのでそれまで暖かく見守ってください。

すいません、滢莉の日記書くのわすれてました。

設定上ひらがなしか使えないこの日記、ほんと読みにくいと思うのですが、読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627f/>

男で中学生なのにママ！

2010年10月22日00時20分発行